



公孫樹

知恵を出せ

汗を出せ

そして鍛えよ



令和3年9月27日発行 発行者：小山市立小山第二中学校長 渡辺 成美

暑いが続いていますが、秋分の日も終わり、秋の気配を感じるようになりました。コロナの感染状況は一時期の山場を乗り越え、落ち着いているようにもみえますが、まだまだ予断を許されない状況です。短縮授業から通常授業に戻り、部活動も再開されますが、「学校の活動を止めない」ためにも、今まで以上に感染予防対策に取り組み、安心・安全な学校生活を送れるよう努めてまいります。

ポストコロナ期における 新たな学びの在り方



現在、小山市より一人一台配給されたタブレットの活用について、教師も研修に取り組み、オンライン授業等への準備を進めています。すでに、ご家庭に持ち帰り動作の確認等を実施しているところですが、対面指導を基本としつつ、オンライン教育を適宜取り入れながら、双方の良さを最大限に生かしていきたいと考えています。

また、普段の授業においてもタブレットを学びの道具として有効に活用しながら、新たな学びの在り方を考えていきます。

～ 文部科学省

教育再生実行会議 抜粋 ～

教師をはじめとする教育関係者が学習者主体の視点へ転換をするという意識改革を図り、新たな学びの着実な定着、教師の質の向上と数の確保、デジタル化への対応などを総合的に進めていく必要があります。特に、昨今急速に進みつつあるデジタル化は、今後も社会のあらゆる面で更に加速することが予想されます。デジタル化は、教育の新たな可能性を拓き、ポストコロナ期の新たな学びにおいても効果的な手段となり得ると考えられるため、教育においてもデジタル化に適切に対応しつつ、データ駆動型に転換していく必要があります。



3年生進路説明会

9月9日と22日の2日間にわたり3年生の進路説明会が行われました。例年は生徒と保護者の皆さんと一緒に話を聞きますが、本年度は密を避けるために生徒と保護者を別の日に設定し行いました。残暑の厳しい中、参加していただき大変ありがとうございました。

進路決定のポイントや入試スケジュール等についてアドバイスしましたが、「どの高校なら行ける」ではなく、「どの高校に行こうかな」という選択を大切にしたいと思っています。



😊 二中 PRIDE 😊

2学期が始まり、生徒を正門で迎えてから駐輪場を見に行きました。素晴らしい！！自転車のスタンドがライン上に綺麗にそろえてあり、ハンドルが同じ方向を向いています。とても爽やかな朝の風景です。まさしく「二中 PRIDE」ですね。



何のための「通信票」

先日、9月17日付で「通信票の見方」について配布しました。児童生徒にとっては、一つの学期間に自分自身が行ってきたことに対する学校・教師が出す「先生からの評価」として、ハラハラ・ドキドキしながら受け取るものになります。

「通信票」の目的は、子どもの学習状況や行動等の状況を家庭に知らせ、本人に次への期待と意欲をもたせるためのものです。何年か後に子どもがその「通信票」を見て、励まされるような「通信票」であってほしいと願っています。

以下の文章は、女優の岸本加世子さんが「通信簿」という題名で、母親のことを書いたものですが、その「通信簿」をそのままにしておいた担任教師も岸本さんの母親の心を理解していたのではないのでしょうか。いい話なので読んでみてください。

「通信簿」 岸本加世子

ダンボールの山の中でこの原稿を書いている。16年間住み慣れた家を引っ越す事となった。

便利なお時世。「らくらくパック」なる全てやってくれるサービスを発注したものの、問題は8年前に亡くなった母の荷物だ。これまで一度も手をつけずそのままにしていた。引っ越しの慌ただしさの中でも、亡き母の荷物を整理するのは、やっぱりたまらないものがあった。

赤茶けたノートには母の字で、「加世子育児日記」と書かれてある。ペラペラとめくっただけでも、困窮した生活の中、胸にかきいやく様にして育てた様子が目に飛び込んでくる。慌ててノートを閉じると、今度は小中学時代の私の通信簿が出てきた。1から5までの五段階の評価が、科目別にスタンプで押してあるのだが、今度は思わず吹き出してしまった。

母は、人様に迷惑かけるなとか、義理だけは欠かすなとか、感謝を忘れたら終わりだとか、そう言う事はうるさかったが、からっきし勉強ができない事に対しては、あきらめたのか全く言わなかった。「おらん子どもでしょんないだいなー」と笑っていた。

ある時、勉強が出来ない事で、私が卑屈になっていたのだろう。母は「ボールペンかしょー！」と命じる。どうするののかと思えば、新学期には担任に戻す通信簿に何かを書き始めた。そして、しょげ返る私を励ますように言った。「1なんつーもんは、こうすりゃー5になるだよ！」スタンプの1という数字をボールペンで5と書き換えてしまうのだ。2は3にしてしまう。その時は、何てことするんだ先生に怒られる。としか思わなかった気がする。げんこを振り上げ母に反抗したかもしれない。

しかし、今になって思うと、母が言わんとしたことが何となく解ってくる。

すっかり黄ばんでしまったその通信簿。力強くボールペンで書かれた立派な5が並んでいるのを見ると、気恥ずかしさと共に、この私と母だけの5という数字のお陰で、子ども心に劣等感だろうか目の前の巨大なカベが吹き飛んだのではないかと思う。

それにしても乱暴な話だ。「まったく何て親だ！」笑いながらも思わず悪態が口をついて出た。

でも、そのあとやっぱり泣いてしまった。

